

## 「附高ゼミ」の取り組み

青山 昌平\* 小塚 良孝\*\*

\*附属高等学校

\*\*外国語教育講座

### 1 附属高校における附高ゼミの取り組み

#### (1) 附高ゼミ実施の背景

##### ① 附属高校のスクールポリシー

附属高校で掲げているスクールポリシーの  
では、目指す生徒像として「地域と協働し、  
子どもを成長させられる小中高特などの教  
諭」、「多様性を理解し、周囲と協働して地域  
社会で活躍できる人材」を掲げている。そし  
て、これを実現するために生徒に身につけさ  
せたい資質・能力を「人生を切り開く探究力」  
と表現した。この「人生を切り開く探究力」は、  
「主体的に学び続ける力」、「他を受け入れ協  
働する力」、「新たな価値観を創造する力」と  
いう3つの資質・能力を総合的に身につけた生  
徒の姿とした。

##### ② 探究活動の必要性

スクールポリシーで掲げた資質・能力を育  
成するためには、通常各教科の学びだけで  
なく、総合的な探究の時間を軸とした探究活  
動を行う必要性が生じた。また、本校では4  
クラスを30人編成とした学年が2021年度より  
始まった。この新たな歩みを始めた学校の1  
つの魅力として、新しい探究活動を行うこと  
になった。また、平成30年告示の学習指導要  
領では、総合的な学習の時間が総合的な探究  
の時間へと変更された。社会の変化が激しく、  
予測困難な時代を生き抜くために、課題発見  
や課題解決するために必要な知識や技能を習  
得し、他者と協働しながら新たな価値を創造  
できる生徒の育成が目標として掲げられてい  
る。以上の背景から附高ゼミが計画された。

##### ③ 附属高校の強みを生かした探究活動

この附高ゼミを独自の探究活動にするため

に、1クラス30人という学級規模と愛知教育  
大学との連携という2つの強みを生かした探  
究活動にすることが目指された。

#### (2) 附高ゼミの概要

##### ① 第2学年の「総合的な探究の時間」の計画

表1 附高ゼミの3年間の計画

	1年生	2年生	3年生
4月	【個人探究】 探究基礎講座	【グループ探究】 地域編 SDGs総選挙	【個人・グループ探究】 附高ゼミⅡ
5月			
6月			
7月			
8月			
9月		【個人・グループ探究】 附高ゼミⅠ	探究まとめ
10月			
11月			
12月			
1月			
2月	【グループ探究】 学校編 SDGs総選挙		
3月			

附高ゼミでの探究活動を見据え、1年次より  
探究活動に必要な知識・技能を習得する場  
を設定してきた。テーマ設定、問い作成、仮  
説設定、調査・探索、まとめ、発表という探  
究活動の一連の流れを3回経験し、探究活動  
の基礎的な知識・技能を学んでから附高ゼミ  
に臨んだ。

##### ② 少人数のゼミ活動

今年度10月に開始された附高ゼミⅠでは、  
大学との連携を考慮して大学教員の所属組織  
構成（大括り組織の「学系」と個別組織の「講  
座」等）に基づいて8つのゼミ群を設定し、  
生徒の所属ゼミはこのゼミ群と各自の関心に  
基づく探究テーマに沿って決定した。

表2 附高ゼミの8つのゼミ群

ゼミ群*
教育科学1 (学校教育、生活科総合、特別支援教育、幼児教育、養護教育)
教育科学2 (心理、福祉、教育ガバナンス)
人文社会1 (国語教育、日本語教育、外国語教育)
人文社会2 (社会科教育)
自然科学1 (数学教育、情報教育)
自然科学2 (理科教育)
創造科学1 (音楽教育、美術教育、技術教育)
創造科学2 (保健体育、家政教育)

\*「教育科学」等の左端の名称は学系名、カッコ内は講座等の名称

③ 附高ゼミの組織

附高ゼミでは、高校教員が主となってゼミを担当し、ファシリテーター役となって生徒の探究活動を支える。ここに、大学教員がアドバイザーとして参加し、愛知教育大学の教職大学院生と学部生がサポーターとして参加している。さらに、企業から講師を招いたり、外部施設を訪問したりするなど、外部から幅広い協力を得ながら運営している。

④ 大学との連携

附高ゼミをより充実した探究活動にするための方策として大学との連携を重視した。連携の内容には例えば以下のような点がある。

- ・大学教員をアドバイザーとして各ゼミに最低1人設置する。大学教員はテーマや問いの内容、探究活動の進め方など探究活動について支援する。
- ・院生や学部生をサポーターとして配置し、探究活動について支援する。
- ・附属高校が大学キャンパス内にあるという環境を有効活用して実験施設や器具の提供などを受ける。

こうして生徒が自分の探究活動について質問する機会や助言を得る機会を増やすことで、探究活動を深めやすくしている。

⑤ 外部人材・施設との連携

生徒の探究活動を深めるために、外部人材・施設の活用を積極的に行っている。外部

人材としては企業から人材を派遣してもらい、専門的な知識の伝達や、探究活動の進め方や内容についての助言や支援をしてもらう。また、特別支援学校や企業への訪問、幼稚園や小学校へのアンケート依頼など、外部施設を活用している生徒もいる。こうして、外部人材・施設を有効に活用することで幅広く多様な探究活動の実施につながる体制づくりを行っている。これにより、高校教員では対応が難しい探究活動に対しても臨機応変に対応することが期待される。

(3) 実際の学習活動

① 附高ゼミの目標

課題発見能力と協調性と表現力の3つ資質・能力の向上を1年次から目標として掲げている。それぞれの指標項目と身につけたい技能や態度は、以下の通りである。

表3 附高ゼミにおける育成目標

指標項目	レベル4
課題を自ら発見し、その解決のための方法を見出す力	現代の様々な課題を認識し、それらを多面的・論理的・批判的に分析し、具体的な解決のための方策を、根拠をもって見出そうとすることができる。
課題解決方法を作成または実行し、検証・改善する力	現代の様々な課題の解決のために、他者と協働的に取り組み、その実践に対して多面的に評価・分析して、次の課題を見出し取り組むことができる。
コミュニケーション能力	多様な集団などとの関係において、自分の意見などを相手の立場に立って積極的に伝えたり、相手の意見などを共感的に受け入れようすることができる。
合意形成する力	異なる立場の意見を理解し認め合った上で、目的や目標に応じて多面的に議論し、与えられた条件の中で最善の考えとなるよう合意形成することができる。
自分の考えを最適な形で表現できる力	ポスター、文章、言語能力、ICT技術等を活用し、世界中の人々といった多様な人に向けて自分の考えや探究成果をわかりやすく伝えることができる。

② 令和4年度附高ゼミのスケジュール

表4 附高ゼミのスケジュール詳細

	日付	活動内容
【テーマ・問い・計画作成】 第1期	10月24日	ガイダンス テーマ決め
	10月27日	テーマ決め 調べ学習
	10月31日	調べ学習
	11月7日	問い・仮説の設定
	11月10日	探究計画作り1
	11月14日	探究計画作り2
	11月17日	探究計画完成
	11月21日	問い・計画報告会準備
	11月24日	問い・計画報告会
	【調査・まとめ・発表】 第2期	12月8日
12月15日		調査活動
1月12日		調査活動
2月2日		まとめ1
2月9日		まとめ2
2月16日		まとめ3
3月9日		発表リハーサル
3月16日		発表会

第1期では、探究計画書の作成を目指して、調べ学習、問い・仮説設定を行った。調べ学習をする中で探究内容や問いを修正しながら探究計画の作成を進めた。

2度の調査活動は割り当て時間を授業2時間分とするなど、校外の活動や実験活動を行

いやすいようにスケジュールを工夫した。

③ 探究内容

個人的な興味・関心に基づき、「学問探究型」もしくは「課題提案型」の探究活動を行う。学問探究型では、自分自身が興味・関心のある学問や疑問について深く探究し、課題提案型では、地域や社会の諸課題について自分なりの解決案の提案を目指して探究する。

④ 附高ゼミのゴール

2年次3月と3年次9月の文化祭では全員が自分の探究内容を発表する。

さらに、希望者には外部コンテストへの応募、愛知教育大学附属高校で開催されるシンポジウムでの代表者発表、探究活動実践報告への掲載、高校教員・大学教員との共著による愛知教育大学の論文集への投稿を活動の最終的な学習のゴールとして設定している。

⑤ 学びの型の設定

図1に示したイメージ図は、附高ゼミの学びの型である。教員と生徒が探究活動の流れを共有できるように図示した。

これまでの学習で、テーマ設定直後に問いを設定すると問いが定まりづらかったり、深めることができなかったりといった反省が挙がっていた。そのため附高ゼミでは、テーマ設定後、問いの作成を行う前に調べ学習を組み込んだ。それにより自分の興味・関心ある

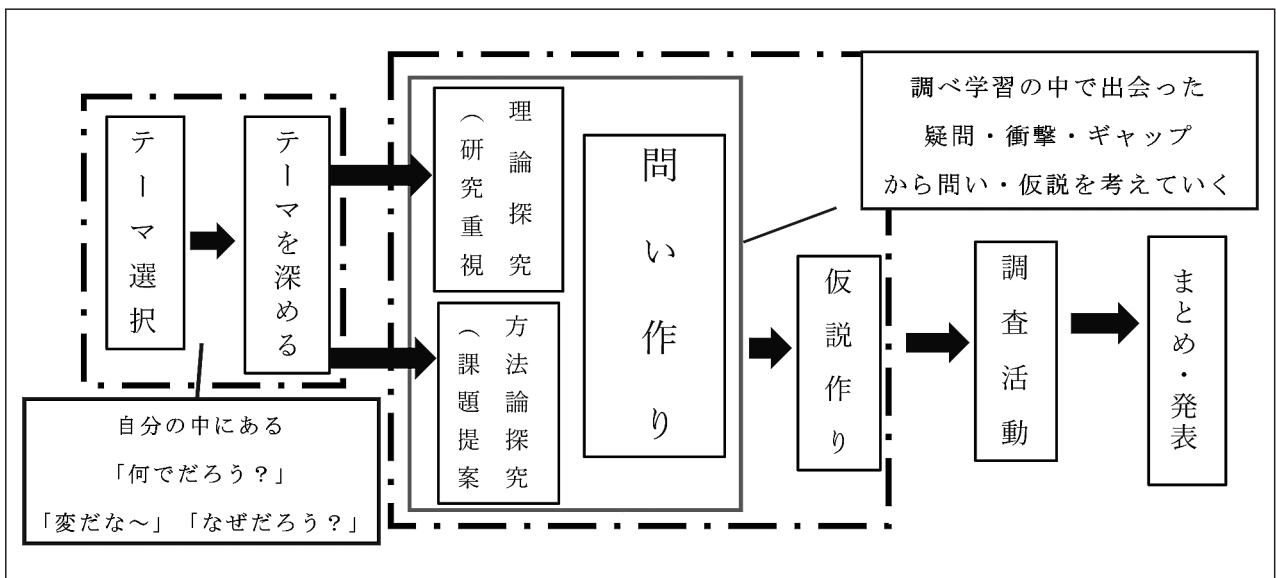


図1 附高ゼミの学びの型イメージ図



テーマについて調べていく中で出会った疑問などを踏まえた問いを作成することを目指した。その後、問いに対してどのような内容を調べる必要があるかを考えながら仮説を設定し、その後、設定した仮説に基づく調査・考察、収集した情報などの整理・分析を行い、最後にポスターなどを作成して調査結果をまとめ発表するという学習の流れを作った。

#### ⑥ 大学教員の参画

大学教員には、10月27日のテーマ決め・調べ学習と11月24日の問い・計画報告会の2回は全員参加してもらうことができた（今年度の参画教員の一覧を末尾に掲載した）。生徒の探究内容に対して直接的な助言をする場面や生徒の疑問や探究したい内容を質疑応答の中で引き出している場面が各ゼミで見られ、生徒は探究活動を深めていた。この2日間以外にもゼミ活動に参加してもらうことができ、生徒は自分の探究活動を修正していくことができていた。

#### ⑦ 教職大学院生と学部生の支援

教職大学院生は各ゼミ群に1人配置し、生徒の探究活動に対して助言等をしている。また、学部生も2名参加しており、木曜日の活動では積極的に生徒と関わり、探究活動に対して助言をしている。

#### ⑧ 外部機関への調査活動

探究活動をより充実させるため、12月15日と1月12日の調査活動では、校外での調査活動を許可し、そのために授業時間を2時間連続にした。この時間を活用し、名古屋大学附属図書館での調査、福祉サービス企業でのインタビュー調査、愛知教育大学附属特別支援学校でのインタビュー調査を実施する生徒がいた。さらに、授業時間外で聾学校を訪問して授業見学やインタビューをする生徒や、小学校や幼稚園へアンケート調査を依頼する生徒など、自身の探究活動のために、高校内だけでは得られないデータや情報の収集に努める生徒もいた。

#### (4) 探究活動で行っている支援例

附高ゼミは生徒が主体となって自分の興味・関心に基づいた探究活動を行うものである。しかし、生徒の知識や技能だけでは達成できない課題や探究活動がある。そのような場合には、高校教員を中心に支援を行い、生探究活動が望ましい形になるように工夫をしている。

##### ① 物品費や交通費の補助

書籍や実験材料など探究活動に必要な物品は全て学校に揃っているわけではないため、生徒が希望する物品を随時購入できるようにしている。また、外部施設への調査活動に関する費用についても支給している。今年度は三菱みらい財団の助成を受けているため、その助成金により費用を支援している。

##### ② 外部施設との調整

外部施設での見学やインタビュー、アンケートの実施が必要になった場合（表5に詳細を記載）には、高校教員が最初の連絡や日程調整を行ったが、その後は生徒自らが調整等を行った。

表5 生徒の探究内容と調整内容

探究内容	調整内容
小学校でアクティブラーニングを取り入れるメリット・デメリット	小学校の先生へのアンケートを依頼し、見本を送付して検討を依頼
子どもへの声かけの方法と言葉選び	幼稚園と保育園へのアンケートを依頼し、見本を送付して検討を依頼
音楽や体育の実技系教科の授業から考える聾学校の特色	学校訪問と授業見学、インタビューの依頼をし、日程を調整
障がい者教育では長所と短所のどちらに目を向けるか	特別支援学校の先生へのインタビューを依頼し、日程を調整

##### ③ 専門性が求められるテーマへの支援例

探究テーマの専門性が高い場合は、高校教員だけでは対応が難しい。その場合は、専門性を補ってくれる大学教員への協力を依頼し

た。例えば、自然科学2のゼミでは理科の専門性だけでなく、実験方法の検討や実験の実施といった協力を得た。また、教育科学1で特別支援教育についての専門性が必要となった場合には大学教員に協力を依頼した。それにより、大学の講義で使用した資料や論文の紹介など探究活動に対する助言を得ることができた。

## (5) 反省と改善点

### ① 専門性の不足に対する補充方法

個人探究の形式を取っているため、探究内容が多岐にわたる。高校教員は専門的な知識を教える役割ではなく、探究活動を導くファシリテーターの役割を担うが、探究内容が高度に専門的であったり、担当教員の専門教科から外れていると、助言や支援が十分できない。このような状況においては大学教員や外部人材の協力を得ながら生徒の探究活動を支援していくのが附高ゼミの特徴であるが、この支援方法においてはまだ課題が多い。例えば、アンケートの外部依頼では、調査紙作成や協力依頼のスケジュールの見通しが甘く、円滑に進めることができなかった。

### ② 附高ゼミの連携図の共有と計画の整理

生徒一人ひとりの探究活動に多くの人材が関わることができるのが附高ゼミの特色である。しかし、多くの人に関わることができる分、連絡や活動内容・目標・進行方法の共有が難しい部分がある。これを解決するためには、事前の日程確認や意識共有が非常に重要である。本校では、探究推進部という新たな分掌を設置し、調整役を担い、円滑な附高ゼミの運営を目指している。

### ③ 学習目標と附高ゼミの一致

今回の附高ゼミでは個人探究を基本とした。そのため、目標にあげた「コミュニケーション能力」や「合意形成する力」を育む活動としては不十分であった。そのため、今後はペアやグループでの探究を導入するといった計画や学習形態の見直し、目標設定の検討を

行っていく。

### ④ ゼミ運営の工夫

それぞれのゼミでは、高校教員、大学教員、教職大学院生、大学生が配置されていた。しかし、各々が個別に活動することが多く、全てのゼミを通じた十分な連携がとれていなかった。ゼミ内で運営方法や活動内容の打ち合わせをする時間を作ったり、運営マニュアルを作成したりして組織的に運営できる方策を練っていききたい。

### ⑤ 生徒個人の進度に合わせた探究活動の実施

探究活動の進度には個人差があり、全員が一律のスケジュールで動くのが難しかった。そのため、3つの改善を行う。1つ目は生徒用のワークブックの工夫である。ワークブックには、テーマ設定からまとめまでの全ての活動を入れ、さらに自分の探究活動を自分自身で点検と調整ができるようにセルフチェックシートを組み込む。こうすることで、個人の進度に合わせた探究活動がしやすくなるだろう。しかし、報告会や発表など期限を守らなければいけない部分もあるため、最低到達の内容と時期を目安として提示していく。2つ目は面談を活動計画に組み込むことである。探究活動には定期的に面談し、活動状況や今後のやるべき事を確認する時間が必須だと痛感した。そのため、面談日を計画に組み込むことで全員が定期的に面談を受けられるようにする。その際には生徒用の簡易的な面談シートと教員用の面談シートを用意する。3つ目は教員マニュアルを作成することである。今年度は活動計画と毎時の授業案を作成していた。この形態だとスケジュールが中心に動く探究活動になってしまう。そのため、テーマ設定からまとめまでの各段階で、生徒にどのような活動に取り組みせるかをまとめたマニュアルを作成する。これにより、生徒の進度に合わせて指示や支援が行えるようになると思われる。

⑥ 全体計画の修正

以上のような反省と改善点を生かし、附高ゼミを中心とした3年間の総合的な探究の時間の計画を修正して、附高ゼミの改善を図っていききたい。その中には、学年間の接続や大学との連携強化も組み入れていききたい。

謝辞

附高ゼミは2022年度三菱育成財団の助成事業「高等学校等が学校現場で実施する「心のエンジンを駆動させるプログラム」として採択され、その支援を受けて実施されました。また、愛知教育大学令和4年度学長裁量経費「教職実践力向上重点研究費」による支援事業にも採択され、その支援も受けました。ここに記して謝意を表します。

2022年度附高ゼミ参画愛知教育大学教員

(\*は未来共創プラン戦略5のプロジェクトメンバー)

氏名	所属、役職
杉浦 慶一郎*	連携・附属学校担当理事
小塚 良孝*	副学長(学生支援・国際交流・未来共創担当)・外国語教育講座教授
石川 恭*	附属学校部長・保健体育講座教授
真島 聖子*	学長補佐(未来共創プラン担当)・社会科教育講座准教授

花井 和志*	教職実践グループ特任教授
山根 真理*	家政教育講座教授
國府 華子*	音楽教育講座教授
岩田 吉生*	特別支援教育講座教授
加藤 淳太郎*	理科教育講座教授
宮川 貴彦*	理科教育講座准教授
幅 良統	理科教育講座准教授
島田 知彦	理科教育講座准教授
中野 博文	理科教育講座教授
齋藤 ひとみ*	情報教育講座准教授
西野 雄一郎*	生活科教育講座准教授
小坂 俊介*	社会科教育講座講師
村松 愛梨奈	保健体育講座

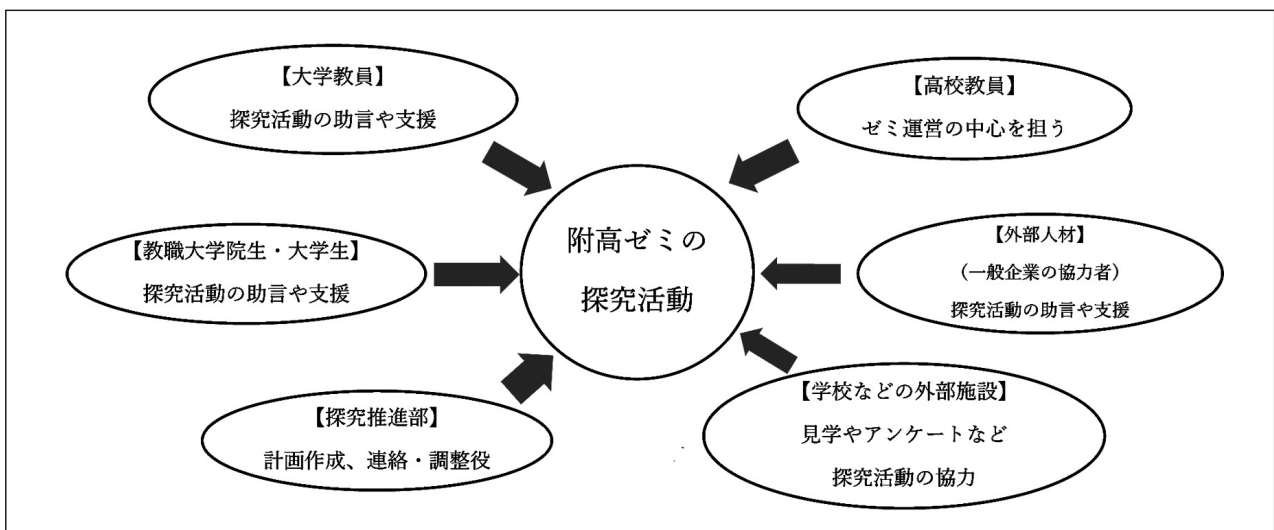


図2 附高ゼミの連携イメージ図